



岩手食文化研究会より

発行日 二〇一〇年十二月十三日

編集者 宮本 義孝 第十六号

映画「タイムグラバあちゃんを観て

考えたこと 幾つか

宮本 義孝

今年(二〇一〇)六月、岩手食文化研究会の総会では、澄川嘉彦さんをお迎えし、タイムグララの暮しについていろいろ話を伺いました。タイムグララには、今、見たような映像記録がありますから、あれこれ口で説明するよりも、こちらの方がよく解かります。夕分、澄川さんもそう考えられたのでしよう、それです。この映画の出だし十分間ほどのところを映し、それからお話に入られました。

その十分ほどの映像を見、澄川さんの話を伺い、その時、私には、心に引っかかって不思議な思いがありました。

タイムグラバはあちゃんの主人である向田久米蔵（向田くめぞう）さんは、歳を取って耳が遠くなったせいかな、話の途中で、突然、黙っ

てしまうことがあるんだそうです。黙ったままお茶をすすったり、湯呑茶碗を眺めたりしている。けれどそんな時でも、澄川さんの、その時の話によれば、気まずい空気でもなく、重苦しい感じでもなく、その側にいれば、ただただ、何か心が落ちつく、気持がホッとする、そんな雰囲気をもった人だったというのです。

また、マサヨさんについても、映画では笑顔の美しいおはあちゃんでした。暖かさ、やさしさが、哀しみを伴って心の底からにじみ出てきたような微笑です。穏やかに物静かな語り口、そしてその話のところどころに混る、ハッハッハという小さな笑聲は、思わず抱きしめなくなるほどの愛らしさです。

映画の出だしは、風の唸りと地吹雪です。タイムグララに電気がきたのは、ほんの最近のこと、それまでは長いランプの暮しでした。水道もなく、生活用水は湧き水、沢の水です。こんな不便な、こんな苛酷な環境の中で、どうしてあんな安らぎな雰囲気、やさしげで暖かな笑顔が生まれてくるのか、それが不思議だったのです。

それを考えるヒントは、夕分、この映画の中にあるんだろうと思います。そんなわけで、事務局の田沢さんにこの映画の上

映をお願いしてました。

今は、映画を見終ったばかりで、思いをあまり上手に表現できないのですが、この映画の中にその手掛りはあったような気がします。

つまり、結論的にいいますと、おそらく乱暴な言い方ですが、それは、人間の心と、自然と、文明との在り方に関係しているように思うのです。

私らが、今、暮らしている所は、山を削り、湿地を埋め、河川も岸をブロックで固め、そこに鉄骨の橋を渡し、アスファルトを敷いて道路を網の目のように通し、ビルディングを建て、団地を造り、そうやって出来た人工の街です。

そんな鉄やコンクリートで固められた人為的な街の中で生活していると、人は知らず知らずのうちに、自分を中心にしてものを考えるようになるのではないのでしょうか。自然と人間の関係でも、自然に対峙する人間、自然を暮らしよいように変えていく人間、果ては、自然に挑戦し征服する人間……

けれど、スミ蔵さん・マサヨさんが生活していたタイマグラは、冬になると、一晩で雪が八センチも積ったり、風が地鳴りのような響きをもたらす早池峰から吹き下ろす。今は暖かくなって、せいぜい零下十五度程度だそうです。昔は、

二四、五度にもなったといっています。

五月になって、ツツドリやジュウイチ、カッコウの鳴声を合図に種を蒔き、やっど苗に育てても、六月、一晩の大霜でトマト、ナス、キュウリ、それに比較的寒さに強いキャベツやレタスまで全滅したりする。時には雨が降り止まず、年ごと肥しを入れて育ててきた畑の土が流されたりもする。

夏は炎天下のもと、のべつまくなし生い茂ってくる雑草に、地を這いつくばるようになって、それを抜きとらなければならぬ。

そんな苛酷な環境の中で、何年何十年と生活をしていると、人間は、自然の前に何んてちっぽけな存在、何んて取るに足らないものであるかが実感されるようになる。そして、そんな思いが、逆に、心に謙虚さを生み、また、生くべきほどの価値をもたぬ自分が生かされていることへの感謝、或は、弱い人間なるが故に、人はお互い、支えあい、励ましあい、いたわりあわなければならぬ、といった心が育まれるのだと思うのです。

近年、文明が発達したことにより、我々の生活は、すいぶん過ごしよくなりました。

けれど、文明の恩恵に浴している今の我々は、昔の人に比

べ、本当に幸せになったといえるでしょうか。生活の便利さと反比例するかのようないじめや引きこもり、鬱病や自殺、不安や苛立ちなどがつのつていっているように思われます。

文明は、我々の生活を便利にはするが、目に見えぬ心の問題にまでは及ばない、というところに、その理由がありそうです。

人のやさしさ・暖かさ・穏やかさ・謙虚さ・感謝・知足・忍耐などといった望ましい心の在りようは、文明の発達とは別次元のように思います。

だからといって、私は文明を否定しているのではありません。今の生活を捨てて、皆、タイムマシンに行け、といっているわけでもありません。一度、手にした文明の恩恵を我々は容易に手離すことができません。けれど、それを認めた上で、物の豊かさや便利さに満足することなく、幸せだったと実感する情^{こころ}を、我々は何にゆって、それをどう育んでいくか、考えていかねばならないと思うのです。

この映画は、過去にあった日本の姿を記録したものです。それはそのとよりで間違つてはいないのですが、ただ、それだけのメッセージではなほなほ気がします。

この映画は、過去の姿を記録しながら、同時に、未来に向

かって、それでは、あなたご自身は、これから何を自指し、何を見詰めて生きていくのですか、と問いかけているような気がするのです。

私も、久米蔵さん、マサヨさんぐらいの歳になったら、精進を重ね、人の悲しみを、我が事のように考えられる人間、また、どんな時にも穏やかで口元に微笑を絶やさぬ人間になりたいものだと思います。

最後にもうひとつ。この映画で、考えさせられたことがあります。

自然の懐に抱かれ、自分が生かされていることと実感している人間は、死後、自分の魂の行き所を心得ているのではないか、と思うのです。死んでも自分の魂は、またこの自然に帰ってゆく、自然が魂の故郷だと感じているように思っています。

寝たままに過ごすことの多くなった久米蔵さんは、或日、用足しをすませた後、

「オレ、オレは、はあ、これで、初め終りにしてえ」と言つて、その三日後、亡くなられたそうです。九二歳というお歳でもあったでしょうが、まるで、死を、ちよつと隣の街にまで出掛けてくる、といったたように、至極、あたりまえに愛

け止め方をしています。

自然に対抗して生きていく我々文明人に、これだけの心のゆとりがあるでしょうか。我々は、死をできるだけ考えないよう、遠ざけて生活しています。そして、死と向き合わねばならぬ場合になると、みっともないほど取り乱します。

そろそろ私も、死を意識せねばならぬ年齢になってきました。た。

「ありがとうございます。そんなじゃね、ちよつとお先に、失礼します」。そんな死の受け入れのたができれば、いいなあ

映画を見ていて、そんなことも考えました。

いい映画を見た後、こんなむさくるしい男が出てきて、何やらわけの分かったような分からぬようなことをブツブツつぶやいているのは、物狂おしい感じはしますが、これも、こういう催しものの定番です。お許しください。

あわたたしい師走の中であって、皆さまがたと一緒に、人間の生き方、在りようを、一時じっくりとも静かに考える機会がもてたこと、本当に感謝です。ありがとうございます。ございました。

(平成二二年十二月十一日(土))、「エスポワールいわて」にて催された、岩手食文化研究会・映画「タイムグラフィはあちのん」鑑賞会終了時の挨拶より)

タイムグラフィとは、

岩手県のはほ中央にそびえる早池峰山東側の山麓にある開拓地。早池峰神社が祀られており、毎年秋には神楽も奉納される。

現在でもカタカナ表記の地名はアイヌ語が起源とされる「タイ(林)」「マクワ(奥)」「ル(道)」で、「林の奥の道」という意味だと言われている。

昔は早池峰山に登る時にひと休みする場所だったため「宿」とか「宿の平」とも呼ばれていた。

第二次大戦後に、食糧難から向田久米蔵さんを団長とする開拓団が入植し、一時は10軒ほどの農家があったが、高度経済成長が続く一九六〇年代には向田さん夫婦を残してみな山を下りてしまった。

長らく電気がなく、一九八八年(昭和六三年)の暮れに通電した時には「昭和の最後に灯った明かり」と話題になった。

現在は、全国から移住した六世帯十七人が暮らしている。「タイムグラフィ通信」澄川嘉彦・編著より